

日蓮大聖人御書全集

やげんたどのごへんじ

弥源太殿御返事

新版
1698
〜
1700

やげんたどのごへんじ

弥源大殿御返事

ぶんえい ねん がつ にち さい ほうじようやげんた

文永11年(74) 2月21日 53歳 北条弥源太

にちれん にほんだいいち びやくにん

そもそも、日蓮は日本第一の僻人なり。その故は、皆人

ふぼ 高 しゆくん だいじ そうろう

の父母よりもたかく主君よりも大事におもわれ候ところ

あみだぶつ だいにちによらい やくしとう ごしんよう ゆえ さんさいしちなん

の阿弥陀仏・大日如来・薬師等を御信用ある故に三災七難

せんだい てんぺんちようとうむかし 過 もう ゆえ けつく

先代にこえ天変地天等昔にもすぎたりと申す故に、結句は

こんじよう み 滅 くに 損 ごしよう だいあびじごく

今生には身をほろぼし国をそこない後生には大阿鼻地獄

お たも いちにちかたとき 弛 呼

に墮ち給うべしと一日片時もたゆむことなくよばわりし故

だいなん 遭 たと なつ むし ひ 飛 焼

に、かかる大難にあえり。譬えば、夏の虫の火にとびくばり、

鼠 猫 前 後 鼠 猫 前 後

ねずみがねこのまえに出でたるがごとし。これあに我が身

し ようじん ちくしやう しんみやう うしな

を知つて用心せざる畜生のごとくにあらずや。身命を失

こころ い びやくにん

うこと、しかしながら心より出ずれば僻人なり。

いし たま 舎 ゆえ 碎 しか ひにく ゆえ ころ

ただし、石は玉をふくむ故にくだかれ、鹿は皮肉の故に殺

うお 味 ゆえ 獲 翠 はね ゆえ 破

され、魚はあじわいある故にとらる、すいは羽ある故にやぶ

によにん 見 目 形 かなら 妬 こころ

らる、女人はみめかたちよければ必ずねたまる、この意な

にちれん ほけきやう ぎやうじや ゆえ さんるい ごうてき

るべきか。日蓮は法華経の行者なる故に、三類の強敵あつ

しゆじゆ だいなん 遭 もの でしだんな

て種々の大難にあえり。しかるに、かかる者の弟子檀那と

たも ふしぎ さだ しさいそうろう あいかま

ならせ給うこと不思議なり。定めて子細候らん。相構え

て、能く能く御信心候いて、よ よ ごしんじんそうら 靈山浄土へまいり給え。りようぜんじようど 詣 たま

また、御祈禱のために、御太刀、同じく刀、あわせて二ふた

つ送り給わつて候。この太刀は、しかるべきかじ作り候おく たま そうろう

かと覚え候。あまくに、あるいは鬼きり、あるいはやおぼ そうろう 天 国 おに切 八

つるぎ、異朝にはかんしよう・ばくやが劍に、いかでかこと劍 いちよう 干 将 莫 耶 つるぎ 異

なるべきや。これを法華経にまいらせ給う。殿の御もちの時ほけきよう 進 たも との おん持 とき

は悪の刀、今、仏前へまいりぬれば善の刀なるべし。譬えあく かたな いま ぶつぜん ぜん かたな たと

ば、鬼の道心をおこしたらんがごとし。あら不思議や、おに どうしん 発 ふしぎ

不思議や。後生にはこの刀をつえとたのみ給うべし。ふしぎ ごしよう かたな 杖 侍 たも

ほけきよう さんぜ しよぶつほつしん 杖 そうろう

法華経は三世の諸仏発心のつえにて候ぞかし。ただし、

にちれん 杖 柱 侍 たも 険 やま 悪

日蓮をつえはしらともたのみ給うべし。けわしき山、あし

みち 杖 倒 こと て 引

き道、つえをつきぬればたおれず。殊に手をひかれぬれば

転 なんみようほうれんげきよう しで やま 杖

まるぶことなし。南無妙法蓮華経は死出の山にてはつえ

柱 たま しゃかぶつ たほうぶつ じようぎようとう しぼさつ て

はしらとなり給え。釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩は手

と たも にちれん 先 た そうら おんむか

を取り給うべし。日蓮さきに立ち候わば、御迎えにまいり

そうろう 先 い たま にちれん

候こともやあらんずらん。またさきに行かせ給わば、日蓮

かなら えんまほうおう くわ もう そうろう すこ

必ず閻魔法王にも委しく申すべく候。このこと少しも

虚 こと にちれん ほけきよう もん

そら事あるべからず。日蓮、法華経の文のごとくならば、

つうそく あんないしや

いっしん しんじん

りようぜん

ご

たま

通塞の案内者なり。ただ一心に信心おわして靈山を期し給

錢

よう

へん

ほけきよう

え。ぜにというものは用にしたがつて変ずるなり。法華経も

闇

ともしび

わた

ふね

またまたかくのごとし。やみには灯となり、渡りには舟と

みず

ひ

たま

なり、あるいは水ともなり、あるいは火ともなり給うなり。

ほけきよう

げんぜあんのん

ごしやうぜんしよ

おんきよう

もししからば、法華経は「現世安穩、後生善処」の御経な

り。

うえ

にちれん

にほんこく

なか

あんしゆう

者

そう

その上、日蓮は日本国の中には安州のものなり。総じて

か くに

てんしやうだいじん

住

初

たま

くに

彼の国は天照太神のすみそめ給いし国なりといえり。かし

にほんこく

探

い

たま

くにみ

廚

こにして、日本国をさぐり出だし給うあわの国御くりやな

り。しかもこの国の一切衆生の慈父・悲母なり。かかるい
みじき国なれば、定めて故ぞ候らん。いかなる宿習に
てや候らん、日蓮また彼の国に生まれたり。第一の果報な
るなり。この消息の詮にあらざれば、委しくはかかず。た
だ、おしはかり給うべし。

能く能く諸天にいのり申すべし。信心にあかなくして、

所願を成就し給え。女房にもよくよくかたらせ給え。

恐々謹言。

にがつにじゅういちにち

二月二十一日

にちれん

日蓮

かおう

花押

やげんたどのごへんじ
弥源太殿御返事